

# イギリス文学・文化・言語の三位一体を目指して

外国語学部 英語英文学科 加藤千博

皆さんこんにちは、英語英文学科の加藤です。私は2024年4月に神奈川大学に着任しました。本稿では、私の研究テーマとその研究に至った経緯、そして本学での教育上の目標をお示ししたいと思います。

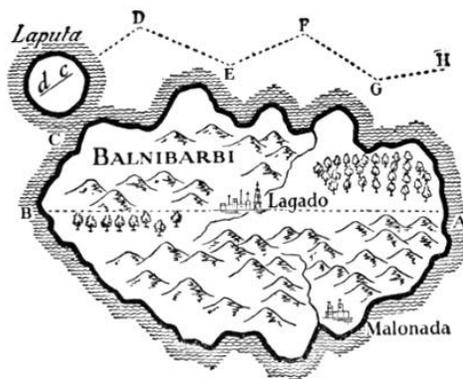
## 研究テーマ——ユートピア文学——

私の研究テーマはイギリスのユートピア文学です。ユートピア文学とは、最も望ましい社会形態、もしくは最も望ましくない社会形態が描かれた架空の物語のことで、古くはプラトンの思想に遡り、トマス・モアが文学としてのジャンルを確立させたと言われています。こうしたユートピア文学作品をポストコロニアルやエコロジー、ジェンダーなどのカルチュラル・スタディーズの視点を取り入れて私は分析しています。ユートピア文学作品の特徴は、多様な解釈が可能であり、その解釈は読者に委ねられているところです。実現不可能な理想社会が示されることで、現実世界を批判し、どうすれば現実社会が向上するかを我々読者

は考えさせられます。私が授業で扱うイギリス小説も多様な解釈が可能な作品が多く、どの登場人物に感情移入するか、結末をどう解釈するか等、議論の題材に事欠きません。



トマス・モアの描いたユートピア島



『ガリヴァー旅行記』に登場するLaputaの地図。  
映画「天空の城ラピュタ」のモチーフとなっている。

## 研究に至る経緯

### — ユートピア文学との出会い —

私がユートピア文学に出会ったのは大学3年生の時です。欧米文化を専攻していた私にとって文学は全く興味のないものでした。「近代イギリス文化論」の授業でたまたま私が発表担当となった箇所が「ヒューマニストの生きたイギリス」という章で、そのなかにあったトマス・モアについて発表をしました。学籍番号順に割り当てられたので、順番が一つでもずれていたらシェイクスピアの発表となり、違う人生を歩んでいたかもしれせん。面倒くさがり屋だった私は、この時に調べたトマス・モアの『ユートピア』をそのまま卒論のテーマとしたせいで、文学研究の道へとずるずると入り込むことになりました。

卒業後は民間企業に就職し文学とは永遠に縁を切るはずだったのですが、(神様のいたずらか、お導きか?)バブル崩壊などもあり、就職を諦め大学院への進学といういばらの道を選択しました(今思えば、無謀な道を選んでしまいました)、これも運命?)。専攻もそれまでの文化研究から文学研究へとシフトし、オルダス・ハクスリーやジョナサン・スウィフトらのユートピア文学作品を研究し、今の研究に繋がっています。

## 教育上の目標 — 三位一体を目指して —

イギリス文学をカルチュラル・スタディーズの観点から分析するという私の研究には、英語も必要となります。文学作品を読む際は、日本語訳も参考にしますが、原文の英語で読むことは欠かせません。そして論文を英語で書いたり、外国の方々と直に文学や文化の議論をしたりもします。英語がすごく得意ということではありませんが、イギリスの現地でフィールドワークをする際には、英語で何とかやり取りをしています。

私の担当する「英語圏文学概論A」の授業では、作品の一節を毎回原文の英語で読んで解釈してることが課題となっています。「Comparative Literature」(English Literary Studies)はオール・イングリッシュの授業で、学生による発表とディスカッションを行うため、文学を題材としながらも英語力の向上にも繋がります。ゼミ(専門研究)「卒業論文」では、文学と文化を表裏一体のものとして捉えて分析し、英語による読解や表現活動も取り入れます。

私の指導方針としては、英文学研究を通じて論理的思考力・批判的思考力を養い、文化研究を通じて異文化理解と多様性への対応力を身につけ、そしてそれらの力を実践的な場で活用できるだけの語学力を修得できるようにサポートできればと思っています。英文学研究を通じて、文学・文化・言語をバランスよく身につけたグローバル人材を育成することが私の目標です。皆さんの学修の一

助になればと思っています。



オックスフォード大学クライストチャーチの食堂。映画「Harry Potter」のホグワーツ魔法学校のモデルとなったところ。フィールドワークで何度か宿泊しましたが、ダンブルドア校長の席で食事をたくて朝一番に行きました(正確には、学生が並んでくれました)。